

フランスにおけるシンポジウム報告書

パリ：

森山 新（お茶の水女子大学 助教授）

クレルモン・フェラン：

高島 元洋（お茶の水女子大学 教授）

1. シンポジウム開催の経緯

この発表は、平成 17 年度の本学『魅力ある大学院教育』イニシアティブ：〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成の事業により、本学・比較日本学研究センターとフランスのコレージュ・ド・フランス（パリ）、ブレーズ・パスカル大学（クレルモン・フェラン）との共催でおこなわれた国際的なジョイント教育とシンポジウムのひとつである。

なおこの企画全体に、本学ロール・シュワルツ・アレナレス助教授がコーディネーターとして関わっており、その周回の活躍によりフランスにおける東洋学の権威との間で双方のこれからの若手が多数参加したシンポジウムが可能となった。その意味でシュワルツ助教授により、国際日本学を海外で構築するうえで最善の環境が準備されたといつてよい。

2. プログラム

2. 1 パリ

テーマ：「18 世紀から 19 世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」

日時：2006 年 3 月 24 日～25 日（2 日間）

場所：コレージュ・ド・フランス（フランス・パリ）

今回の合同シンポジウムでは、文学、地理学、建築学、歴史学のそれぞれの視点から発表と討論が行われた。シンポジウム第 1 日目の 3 月 24 日には以下のような発表があった。

「近世軍記『鎌倉管領九代記』における相州玉縄 森暁子（本学博士後期課程）

「井原西鶴の作品に見る江戸の町」ダニエル・ストリューヴ（パリ第 7 大助教授）

「明治の東京：樋口一葉の小説を視座として」菅聡子（本学文教育学部助教授）

「深川の情景：泉鏡花の小説を中心に」川原塚瑞穂（本学博士後期課程）

「河川の流れて町を読み取る」ベンジャミン・ロシエ（リヨン第 3 大学）

その後、内容に関しパネルディスカッションが行われた。シンポジウム第 2 日目の 3 月 25 日には以下のような発表

が行われた。

「ルイ・クレットマンの写真コレクションに見る明治期の日本建築」ニコラ・フィエヴェ（フランス国立科学研究センター研究員）

『江戸名所図会』について」藤川玲満（本学博士後期課程）

「19 世紀中葉フランスにおける名所図会の受容：フランスのコレクションを通して」ヴェロニック・ベランジェ（フランス国立図書館管理員）

「過去を再現する：『古きフランスへのピトレスク、ロマンチック紀行』に見られる名所、歴史的建造物」アニー・ルノンシア（パリ第 7 大教授・文字研究センター所長）

「明治期東京の名所と観光案内書」高槻幸枝（本学博士後期課程）

「江戸の妖怪と都市空間」内田忠賢（本学人間文化研究科助教授）

「暁斎の滑稽な化け物たち」及川茂（パリ第 7 大客員教授・日本女子大教授）

「江戸の歌舞伎文化」神田由築（本学文教育学部助教授）

その後、内容に関し活発なパネルディスカッションが行われた。

2. 2 クレルモン・フェラン

テーマ：「哲学、倫理、宗教思想—日本とフランス：交差する視点」

日時：2006 年 3 月 29 日

場所：ブレーズ・パスカル大学、哲学・合理性研究センター（クレルモン・フェラン）

「合理主義は比較研究であるべきか」エリザベス・シュワルツ（パスカル大学、元哲学・合理性研究センター長）

「安定性とモジュール性—科学的知識の本質的特徴」三浦謙（本学助教授）

「黄金律—特殊と普遍」ローラン・ジャフロ（パスカル大学、研究科長）

「カントの因果論とヒューム批判」遠藤千晶（本学博士後期課程）

「西田幾多郎の哲学—「場所的論理」と「平常底」」石崎恵子（本学博士後期課程）

「禅僧白隠の思想の特徴」小浜聖子（本学博士後期課程）

「唯一性と多様性—レヴィナスにおける他者の思考をめぐって」木元麻里（本学博士後期課程・フランス留学中）

「日本思想の可能性について—倫理学と倫理思想史」高島元洋（本学教授、元比較日本学研究センター長）

「道元の思想構造」頼住光子（本学助教授）

「本居宣長における神の概念」大久保紀子（本学 AA）

「人類の普遍性、歴史的特異性：巧みな制作による導入」
イヴ・シュワルツ（エクス・アン・プロヴァンス大学）
「超脱のプロティノスの概念」アラン・プティ（パスカル大学）
「マイスター・エックハルト—離脱、放棄、平静さ」エマニュエル・カタン（パスカル大学、哲学・合理性研究センター長）

3. この事業（『魅力ある大学院教育』イニシアティブ）の成果と今後の意味

- ①学生にとって、海外で積極的に発表し学生同士また研究者と交流することが刺激となり、博士論文執筆への動機付けを強化した。
- ②比較日本学研究センターを中心として、本事業に関連する研究支援体制を充実・強化することで、国際化時代に対応する新しい学問の形（国際日本学）を創出した。
- ③今回のテーマは、コレージュ・ド・フランス（パリ）において日本学、ブレイズ・パスカル大学（クレルモン・フェラン）では比較思想であった。

日本文化について、能・歌舞伎・茶道というような分野の紹介はあるが、ものめずらしいというだけで実際はそれほど理解されてはいない。文化をたんに特殊なものとして紹介するのではなく、普遍的な人間の生き方を示すものとしてともに議論する必要がある。今回、日本学の文学、美術、芸能、地理学、建築学、歴史学などの分野で活発な学問的交流ができたことは評価することができる。これらの分野においては高度な専門性も認められ、フランスは充実した交流ができる数少ない国であるという意味でたいへん貴重な企画であった。

つぎに日本思想についてのシンポジウム（比較思想）は、さらに重要な意味があった。これまでも西洋文化と東洋文化の形式的な交流はあったが、異なる文化であるということだけで議論として深まることはあまりなかった。比較思想の議論は、すでにつくされているようにみえて実際はきわめて中途半端なものでしかない。今回の発表では、日本の哲学・倫理分野の現状を説明し、つぎに日本思想の紹介をした。フランスの研究者は、日本文化を極東の不思議な現象ではなく普遍的なものとして理解し、同様に日本の研究者も似かよった議論をしながら本質的にはことなる結論となる問題に関心をもった。

片道 12 時間を要し訪仏して行われた今回のシンポジウムであったが、日本で日本学研究を行う我々にとってもその意義は大であったと言わざるをえない。日本学研究は日本国内で完結すべきものではなく、「内からの視点」と同時に今後よりいっそう重要となっていくのが、海外でいかに

日本研究が行われているかを知るという、「外からの視点」である。また同じ「外からの視点」であっても、東洋における日本学研究と西洋における日本学研究の違いも今回実感した点である。

今後、このような日本学研究のネットワークが維持、拡大され、日本学研究が国際化していくことが望まれよう。